米リベラル派の親イスラエル観と市民宗教，建国神話

船　津　　靖*

序　超党派支持の背景
1　「特別な関係」と聖書
2　米ソ冷戦の価値観共有
3　政教分離と市民宗教
4　アメリカの聖典，聖者
5　『エクソダス』広報戦略
おわりに
註
主な参考文献
英文要旨

序　超党派支持の背景

▼リベラルも支持

アメリカの共和党とイスラエル右派の親密な関係はよく知られている。共和党のトランプ大統領（在2017–21）はエルサレムをイスラエルの首都と初めて認め，在イスラエル米大使館を地中海岸のテルアビブから山間の聖地エルサレムへ移転した。国連安全保障理事会は1980年の決議478で，国連加盟国がエルサレムに大使館を置かないよう強く求めた。エルサレムにはユダヤ教の聖地「西の壁（嘆きの壁）」「神殿の丘」のほか，イスラーム教の聖域「岩のドーム（黄金のドーム）」「アルアクサ・モスク」やキリスト教の聖地も密集している。パレスチナ人はイスラエルが1967年の第三次中東戦争で占領・併合した東エルサレムを将来の独立国家の首都とするこ

* 広島修道大学

とを悲願としている。エルサレムの地位は中東紛争の最大の焦点だ。米大使館のエルサレム移転は明白な国際法違反だった。

トランプ政権が国際社会の批判を振り切って大使館移転を強行した背景には，アメリカの有権者の約４人に１人と推定される保守的なキリスト教福音派（エヴァンジェリカル）の政治的影響力がある。福音派はユダヤ国家イスラエルを神の約束や聖書預言に照らして見る。『創世記』のアブラハム契約「私はあなたの子孫にこの地を与える」に基づき，パレスチナ人が多く住むヨルダン川西岸の併合を目論むイスラエル右派を支持する。福音派は同契約に基づき，イスラエルを蔑ろにすればアメリカも神に見放されると考える。福音派の中でも，近代主義に反発し聖書の言葉を文字通り真実と考える原理主義的なキリスト教徒は，ユダヤ教徒の聖地帰還と再定住を救世主イエス再臨や千年王国（ミレニアム）出現の前兆あるいは条件だ，と信じる。こうした黙示的終末論は福音派のメガチャーチ，大衆向け概説書やライトノベル，ビデオや映画などを通じてアメリカ文化に広く深く浸透している[1)]。

福音派がアメリカ政治の前面に登場してきたのは1970年代半ばだ。1948年のイスラエル独立宣言からほぼ四半世紀経っていた。レーガン大統領（在1981–89年）は，ジェリー・ファルウェル師の「モラル・マジョリティ」（道徳的多数派）の支援を受け当選した。ファルウェル師はイスラエル右派政党リクードのベギン首相（在1977–83）と親しかった。ベギンは占領地東エルサレムを含むエルサレム全体を首都と定める「エルサレム基本法」を制定した。この基本法を非難したのが上記の安保理決議478だ。ベギンは右派長期政権を率いたネタニヤフ首相（在1996–99，2009–21）の師匠筋に当たる。ベギンは初代首相ベングリオ（在1948–53，1955–63）ら主流派の労働シオニストに対し修正主義シオニストと呼ばれる。彼はパレスチナを委任統治領として支配していたイギリスに非合法の武力闘争で挑んだ過激なユダヤ民族主義者だった。

一方，米民主党のリベラルは保守と違い，現在ではイスラエルのパレス

チナ占領に批判的だ。しかしイスラエルが1948年に独立を宣言したとき，米国務省や国防総省の強い反対を押さえ即時独立承認に踏み切ったのは，民主党のトルーマン大統領（在1945–53）だった。トルーマンはソ連共産主義と対決したトルーマン・ドクトリンや原爆投下で知られるが，内政では進歩主義的なフェアディール政策を掲げるリベラルだった。トルーマンは紀元前 6 世紀後半にユダヤ人をバビロン捕囚から解放したペルシャ王に自らをたとえ「私はキュロス王だ」と自画自賛した。米ソ核戦争の勃発も懸念された1960年代初頭，イスラエルとの関係を米英関係とも比肩できる「特別な関係」と初めて呼んだのは民主党のケネディ大統領（在1961–63）だった。ケネディは慣例を破ってイスラエルへのホーク対空ミサイル供与を決断し，アメリカがイスラエルの主要武器供給国になる道を開いた[2)]。次のジョンソン大統領（在1963–69）はベトナム戦争の泥沼化を招いたが，人種差別克服を目指す画期的な公民権法などを成立させたリベラルな民主党大統領だった。ジョンソンはソ連によるアラブ諸国への武器供与とのバランスを取るため，ケネディが先鞭を付けたイスラエルへの武器供与の対象をパットン戦車やスカイホーク戦闘機，さらにファントム超音速戦闘機に拡大した。イスラエルの安全保障のため，中東和平交渉の仲介外交に最大限の努力をしたカーター大統領（在1977–1981）とクリントン大統領（在1993–2001）も民主党だ。オバマ大統領（在2009–17）はヨルダン川西岸のユダヤ人入植地拡大に反対しネタニヤフ首相との関係が緊張したが，イスラーム世界に友好を呼びかけた2009年のカイロ演説で「アメリカとイスラエルの強固な絆はよく知られている。この絆を断ち切ることはできない」と明言した。オバマはイランの核兵器開発疑惑に関連してイスラエルと協力し，スパイウェア「スタックスネット」で史上初の極秘サイバー攻撃「オリンピック作戦」を実施，イランのウラン濃縮用遠心分離機多数を破壊したと見られている[3)]。

民主党のバイデン大統領（在2021～）はトランプ大統領を激しく批判して政権を奪還したが，米大使館をエルサレムの外に再移転することはない

と選挙戦中に早々と公約した。アメリカ世論の親イスラエル傾向や聖地エルサレムへの特別の宗教感情を考慮した判断だ。そもそもトランプ政権が大使館エルサレム移転の根拠としたエルサレム大使館法は1995年，連邦議会上下両院で民主党議員を含む圧倒的多数の賛成で成立した。米中東外交への現実的な配慮から，大統領が大使館移転を半年ごとに繰り延べることのできる条項が付帯され，クリントン，ブッシュ（子）（在2001–09），オバマの歴代大統領は移転を先に延ばしてきた。トランプはそれを止め，超党派の圧倒的支持で成立した法律を実施しただけ，とも言える。アメリカの親イスラエル外交は共和党だけでなくリベラル派の民主党にも共有される超党派の基本政策である。

▼政治文化と冷戦

アメリカのリベラルに親イスラエル観が根強いのはなぜなのだろうか？リベラル派の親イスラエルの歴史的背景として，①アメリカの英植民地時代に遡るピューリタン知識層のユダヤ・キリスト教文化の伝統，②アメリカ独立革命に影響を与えた英哲学者ジョン・ロック（1632–1704）の理神論的な社会契約・人民主権論に代表されるリベラル・デモクラシーの価値観―を挙げることができる。

①のユダヤ・キリスト教の伝統は，専制から自由への脱出を象徴するヘブライ語聖書（ユダヤ教聖書，旧約）の『創世記』『出エジプト記』などの「約束の地」に，新世界アメリカをたとえる。アメリカを神に選ばれた民の「新しいイスラエル」と見る。新約聖書『マタイによる福音書』の「丘の上の町」に重ね，アメリカは自由を世界に広める使命をゆだねられ神の国だと見なす。そうした聖書的イメージに沿って，アメリカ人を統合するナショナル・アイデンティティが形成されていった。アメリカ人の心情的な自己認識の形成過程にヘブライ文化の神話・象徴体系が深く関連している。「イスラエル」は植民地時代から特別の価値を帯びていた。②のリベラル・デモクラシーの価値観は，独立宣言の「生命，自由および幸福を追求する

権利」を全能の神から与えられたとする有神論に基づく自由民主主義的な価値観である。キリスト教プロテスタントの宗教伝統と深い関連を持つが，合衆国憲法が定める信仰の自由，政教分離原則に従い，イエス・キリストや特定の宗教・教派を名指しはしない。従ってキリスト教そのものではないが，キリスト教的な普遍主義である。現代ではカトリックをはじめ他のキリスト教諸教派やユダヤ教も含む「アメリカの市民宗教」と呼ばれることがある。大統領就任式や戦没者追悼式など国家の厳粛な儀式で顕在化すると指摘される。

アメリカ人は，現代のイスラエルがユダヤ・キリスト教の伝統やリベラル・デモクラシーの価値観を共有していると評価する。イスラエルは超大国アメリカの軍事・経済支援を死活的に必要とし，アメリカから評価される民主主義的な国家を目指した。アメリカと親近性のあるイメージを拡散するプロパガンダに努めた。アラブ人が住むパレスチナに入植したシオニスト（ユダヤ民族国家主義者）を，アメリカ西部のフロンティア（辺境）を開拓するパイオニアに見立て，アラブ住民を西部劇の野蛮なインディアンにだぶらせた。アラブ人の土地を奪った複雑な建国史を単純化し，文明的で勇敢なシオニストの建国物語，現代の建国神話によって正当化した。パレスチナ出身の米批評家エドワード・サイードは『オリエンタリズム』で，神話の機能として「起源」の隠蔽を指摘した。アメリカとイスラエルの建国神話では先住者の征服は覆い隠される。北米インディアンやパレスチナ・アラブ人は非西洋世界の未開の原住民として征服者によって表象され，征服された側の人間的な物語が語られることはない[4)]。

ハリウッド映画『エクソダス』（邦題『栄光への脱出』）はアメリカのユダヤ系作家がアメリカ人にイスラエル建国物語を広めるために書いた同名の小説が原作だ。著者レオン・ユリスは異国でマイノリティ（少数派）として生きるディアスポラ（離散）のユダヤ人である。ナチス・ドイツのホロコーストで「戦わず」「羊のように」殺されていったヨーロッパ・ユダヤ人の弱者，犠牲者のイメージを拭い去ることを目指した。アメリカの大衆

が好むタフな戦うシオニストのユダヤ人男性ヒーローの活躍と，アメリカのキリスト教徒白人女性との恋愛を描いた。イスラエル政府は小説執筆のための調査取材や映画の撮影に全面協力した。『エクソダス』の対米プロパガンダは空前の成功を収め，イスラエルは自由と独立のために戦う勇敢な市民の国，ホロコーストの惨禍から不死鳥のようによみがえったリベラルな民主国家というイメージを確立した。

アメリカの市民宗教の起源は植民・建国期に遡るが，ヘブライ語聖書（旧約）を重視するプロテスタント的な「ユダヤ・キリスト教の伝統」は，無神論のソ連共産主義と対決した冷戦初期から特に強調された。その時代の権力・利害関係に応じて，それにふさわしい過去が発見され，つくられていく。ユダヤ教を含めた宗教文化の伝統が強調された背景には，戦前・戦中にユダヤ移民を排斥したキリスト教社会の反ユダヤ主義に対する米リベラルの反省や，ホロコーストによる約600万人もの大量虐殺を結果的に座視した罪責感も反映している。

1　「特別な関係」と聖書

▼新しいイスラエル

ケネディ米大統領がアメリカとイスラエルの関係を形容した「特別な関係」（special relationship）という言葉は，国際政治のリアリズム（現実主義）に基礎を置く通常の同盟を超える関係を意味する。「敵の敵は味方」という格言に象徴される勢力均衡（balance of power）の論理では説明しきれない同盟関係である。アメリカがユダヤ国家イスラエルと特別な同盟関係を構成した要因について，先行研究では宗教，価値観，戦略，イスラエル・ロビー，ホロコーストなどが挙げられてきた[5)]。宗教とは聖書を聖典とするユダヤ・キリスト教（Judeo-Christianity）の伝統だ。価値観とは自由，民主主義，法の支配といったリベラル・デモクラシーの基盤となる価値意識だ。戦略とはアメリカの国家安全保障にとっての戦略的有用性である。イスラエル・ロビーとは連邦議会や大統領に影響力を持つユダヤ系ア

メリカ人の組織・団体・指導的著名人を指す。ホロコーストとはナチス・ドイツによるユダヤ人大量虐殺を防げなかったことへの負い目の感情だ。本稿では宗教と価値観を主に論じる。ユダヤ・キリスト教の宗教伝統と自由主義に関連する諸価値である。

両国の特別な関係を特徴づける宗教とは，聖書（the Bible）を聖典とするユダヤ教とキリスト教だ。いずれも一神教の聖地エルサレムを中心とするパレスチナに起源がある。聖書は主にヘブライ語で書かれた旧約（The Old Testament）とギリシャ語で書かれた新約（The New Testament）からなる。全体の約 8 割は『創世記』などモーセ五書と呼ばれる律法（トーラー）および預言者（ネビーイーム）諸書（ケトゥービーム）で構成される旧約である。キリスト教徒にとってはユダヤ教聖書の旧約も聖典だ。しかしユダヤ教徒にとって福音書やパウロ書簡などからなる新約は，ユダヤ民族の選民性を否定する異教の書である。民族宗教であるユダヤ教の信徒は新約を聖典と認めない。認めたらキリスト教徒になる。ユダヤ人ではなくなる。この非対称関係は，親イスラエルのキリスト教福音派に対するユダヤ人の屈折した感情を生み出す。福音派の熱烈なイスラエル支持を歓迎する一方，福音派はユダヤ教徒をキリスト教に改宗させる密かな野望を抱いているのではないかという警戒心もある。この非対称性は両国関係の非対称性に反映する。アメリカの親イスラエル観にキリスト教の影響が大きいのに対し，イスラエルの親米政策に情緒的なものは乏しく，国際政治の現実主義に根差している。両国の特別な関係では，アメリカの方がイスラエルを一方的に偏愛しているように見える理由である。

旧約とは，神がヘブライ人（古代イスラエル人，ユダヤ教徒）を神の選民とし，その救済を約束した旧い契約（covenant）という意味だ。キリスト教徒から見た呼び名である。新約は神とユダヤ人との旧約が，普遍的な隣人愛や死からの復活を信じるキリスト教徒・教会との新しい契約で置き換えられた，との考え方に立つ。ローマ・カトリックが代表的で，置換神学（supersessionism, or replacement theology）と呼ばれる。一方，カル

ヴァン派をはじめとするプロテスタント改革派は旧約と新約の継続性・統一性を重視する。この思想は置換神学に対し契約神学（covenant theology）と呼ばれる。

アメリカのプロテスタントは，20世紀半ばまで主流派（メインライン）だったリベラル派も1970年代後半から影響力を強める福音派も契約神学が源流にある。新約の『ローマの信徒への手紙』11章23節の「神は彼ら（ユダヤ教徒）を再び接ぎ木することがおできになる」などを典拠に，イエスを拒んだユダヤ人にも将来，神の恵みが与えられる可能性があるとする。神の恵みとは福音であり，キリスト教徒への改宗だ。

アメリカの宗教文化はプロテスタントの会衆派（Congregationalists），長老派（Presbyterians）などの諸教派（denominations）間の競争によって形成され発展した。17世紀のピューリタン（清教徒）は英国教会の迫害を逃れた改革派が中心だった。マサチューセッツ湾岸のプリマスやボストン近郊のピューリタンは旧約を重視した。新大陸アメリカを旧約の「約束の地」（the Promised Land）に重ねた。『出エジプト記』は，エジプトのファラオの専制支配下で奴隷状態にあったヘブライ人が，預言者モーセに率いられ約束の地カナン（現イスラエル／パレスチナ）を目指す物語だ。エジプト軍の追手を逃れるヘブライ人の前進を葦の海が阻む（14章）。神ヤハウェによる奇蹟で海水が真っ二つに割れるシーンは，ハリウッドの大作『十戒』（The Ten Commandments, 1956年）でも有名だ。ピューリタンにとって脱出すべきエジプトはイギリスをはじめとするヨーロッパ旧世界だ。ファラオは改革派を弾圧する英国教会の首長である国王やカトリックのローマ教皇だ。葦の海は大西洋，北米新大陸のニューイングランドは約束の地カナンであり「新しいイスラエル」（New Israel）「新しいエルサレム」（New Jerusalem）だ。アメリカを神に選ばれた地と見るアメリカ例外主義（American exceptionalism）である。

アメリカの宗教学者シャローム・ゴールドマンは「聖書的自画像は初期アメリカの思想を支配していた」「アメリカは聖書に起源をもつ国だ，世界

で重要な役割を果たすべく神に選ばれた国だという観念は，われわれの中に強く残っている」と，現代もそうした宗教的アイデンティティが根強く存在すると指摘した[6)]。『出エジプト記』20章で，モーセはシナイ山に登りヤハウェから十戒を記した石板を受け取る。22章には「寄留者を虐待してはならない。抑圧してはならない。あなたがたもエジプトの地で寄留者だったからである。いかなる寡婦も孤児も苦しめてはならない」といった「人道主義的律法」と呼ばれる戒めが続く。寄留者とは現代なら避難民や移民のことだ。リベラルが強調する他者への寛容や社会福祉に重なる。

▼ピルグリムズ

ニューイングランドの歴史は1620年冬のプリマス植民地建設に始まる。信仰の自由を求めて移住したピルグリム・ファーザーズ（巡礼父祖）のメイフラワー誓約（Mayflower Compact）は，社会契約に基づくアメリカ民主主義の源泉としてアメリカの建国神話，自由の伝説を支えてきた。メイフラワー号の乗船者102人の約半数は，英国教会の宗教改革が不徹底だとして同教会からの分離を求めるピューリタンだった。メイフラワー誓約は「神の名により」「神の恵みにより」「神の栄光のため」と神に繰り返し言及し「神と各自相互との間で，厳粛に相互に，契約により一つの政治体に結合し，もってわれわれの間の秩序をよりよく形成」すると誓った[7)]。

マサチューセッツ湾植民地の初代総督ジョン・ウィンスロップ（John Winthrop, 1588–1649）は英ケンブリッジ大学出身で，英国教会の改革を目指す非分離派のピューリタンだった。1630年の復活祭の翌日，約1,000人が乗船する植民会社の大船団を出航させた。ウィンスロップは自らをモーセに模した。旗艦アベーラ号船上での説教の言葉「われわれは神との契約に入る」「丘の上の町（a city upon a hill）となり，すべての人々の目が我々に注がれていることを考えなければならない」は「マタイによる福音書」５章14節の「あなたがたは世の光である。山の上にある町は，隠れることができない」を踏まえている。新世界へ向かうピューリタンは全世界の人

類のため神の企てに参加するのだという高揚感に包まれている。神は我々が諸国民の光となるよう新大陸を与えた，神の選民である我々は自由のための特別の使命を担っている，失敗は許されない，との思いだ。こうした信条はマサチューセッツ湾岸のピューリタンに根付き，アメリカ思想の基調となっていった[8)]。近年ではレーガン大統領が1989年の告別演説で「輝く丘の上の町」と呼んでウィンスロップのキリスト教信仰に基づく想像上のアメリカに思いをはせた[9)]。

改革派のカルヴァンはルターらと同様に「聖書のみ」（sola scriptura）を唱えた。聖書の言葉がキリスト教信仰の唯一かつ誤りのない権威だと主張し，ローマ教皇やカトリック教会の権威を否定した。カルヴィニズムから発したピューリタンは聖書の言葉だけが神の真理を啓示すると考え，旧約のヘブライ語を重視した。ヘブライ語は人類最初の言語とされ，諸民族の起源や未来の運命というミステリーを説き明かすカギと考えられた。ピューリタンのニューイングランド入植後まもない1636年，神学校としてハーバード大学が設立された。ハーバードなどではヘブライ語の教育・研究が一時ひじょうに重視された。この知的・宗教的潮流はキリスト教ヘブライズム（Christian Hebraism）と呼ばれる。

2　米ソ冷戦の価値観共有

▼独立宣言と合衆国憲法

リベラリズムは多義的な言葉だ。本来は封建制度や絶対王政などの束縛から個人を解放し自由を目指す政治哲学である。アメリカのリベラル派の親イスラエル観は，聖書の宗教伝統と共に自由主義の価値観に支えられている。アメリカ独立宣言と合衆国憲法はリベラル・デモクラシーの自由主義的な価値観（values）を強く打ち出した。現代のアメリカ人はイスラエルも同じ価値観に基づく国だと考えている。自由，人権，法の支配，権力分立，政教分離といった民主政治の基本原理を構成する価値観だ。その淵源には「造物主」「全能の神」からの啓示（revelation）があるとされる。神

が価値の保障者だ。この神観念はユダヤ・キリスト教の神である。ユダヤ・キリスト教の宗教伝統とリベラル・デモクラシーの価値観は関連している。

第３代大統領となるジェファソン（在1801–09）が1776年に起草した「アメリカの13邦（States）の独立宣言」は，自然法や自然の神の法（Laws of Nature and of Nature's God）により，人民が政治的束縛を断ち切って分離独立することを認められる場合がある，と述べた後「われわれは以下の真実を自明のものと信じる。すべての人が平等に造られ，創造主（Creator）によって一定の不可譲の権利を付与され，その中に，生命，自由および幸福を追求する権利（Life, Liberty and the pursuit of happiness）が含まれること」と宣言した。アメリカの独立宣言はフランス革命の人権宣言はじめ世界史と人権思想に大きな影響を与えた。日本国憲法13条の「生命，自由及び幸福追求に対する国民の権利」もアメリカ独立宣言に由来する。イエス・キリストの父なる神と明示されてはいないが，政治的独立や個人の権利は「神の法」「造物主」の名で保障されている。

1788年に成立・発効した合衆国憲法の前文は「われら合衆国の人民は」（We the people of the United States）で始まる。連邦政府樹立の目的に「われらとわれらの子孫のために自由のもたらす恵沢（the Blessing of Liberty）を確保」すると明記した。主語の “We the people of the United States” は1945年の国連憲章冒頭「われら連合国の人民は」（WE THE PEOPLES OF THE UNITED NATIONS）」に引き継がれた。「日本国民は」（We the Japanese people）で始まる憲法前文の「わが国全土にわたって自由のもたらす恵沢」（the blessing of liberty throughout the nation）もアメリカ憲法前文の言葉から取られている。合衆国憲法は世界で初めて立憲民主主義を定めた成文法典である。そのリベラルな価値観が現在，日本を含む先進７カ国（G7）やヨーロッパ連合（EU）諸国が中国の海洋進出や人権侵害，ロシアのウクライナ侵略を批判する際に言及する「共通の価値」「普遍的な価値」の基盤である。イスラエルが位置する中東地域は，国王や軍人が独裁

的権力を持つ国が大多数だ。アメリカ国民にはイスラエルが中東でリベラルな価値を共有する「西側」であることがアピールする。イスラエルは中東という「独裁国家の海に浮かぶ貴重な民主主義の島」として評価される。

▼シオニストとリベラル

イスラエルは政治的シオニズム（political Zionism, ユダヤ民族国家主義）によって建国された。政治的シオニズムは，聖地エルサレムを中心とするパレスチナへの約2000年ぶりのユダヤ人帰還と民族国家再興を悲願とした。民族宗教のユダヤ教と民族自決主義の混合物だ。政治的シオニストはロマノフ朝のロシア帝国やソ連が支配する地域の出身者が大半だった。ロシアや東ヨーロッパの反ユダヤ主義による差別や迫害，ポグロム（ユダヤ人虐殺）を経験していた。西洋キリスト教社会で異教徒のマイノリティとして権利を制限されてきたユダヤ人は，宗教の自由をはじめとする政治的自由，恐怖からの自由を渇望していた。シオニズムに「政治的」という形容詞がしばしば付されるのは，宗教的シオニズムと区別するためだ。宗教シオニストの中には，神意ではない人為による世俗的なユダヤ国家に反対する人も少なくない。

アメリカ憲法は，権利の章典に当たる1891年の10カ条修正条項の第１修正（修正第１条）で，言論の自由と並び，国家と教会の政教分離を真っ先に規定した。イスラエルの初代首相ベングリオンらシオニスト主流派も国家とユダヤ教との政教分離を志向する近代主義者（モダニスト）だった。シオニストの多くは労働組合運動の活動家出身だ。シオニスト主流派の社会民主主義的な価値観は，「大きな政府」による失業・貧困対策を進めた民主党リベラル派ローズヴェルト大統領（在1933–45）のニューディール政策と似通っていた。この意味でのリベラルは，連邦政府の財政出動や労働立法など国家の介入で社会的平等をもたらそうとする進歩主義に重点がある。ユダヤ人は，白人アングロサクソン・プロテスタント（WASP）が支配的な当時のアメリカで，ヨーロッパほど激しくなかったとは言え，露骨

な反ユダヤ主義にさらされるマイノリティだった。ユダヤ系市民は民主党支持者が大半だった。ローズヴェルトはアメリカのシオニスト運動を牽引したユダヤ系のルイス・ブランダイス弁護士の能力を高く買っていた。ブランダイスは民主党革新主義のリーダーでもあった。ローズヴェルトはブランダイスをユダヤ系初の最高裁判所判事（在1916–39）に任命し，ブランダイス判事は弱者保護のための社会経済立法の合憲性を擁護した。

アメリカのユダヤ系指導層は宗教の自由が尊重されるアメリカ社会への同化を最重視した。彼らはユダヤ人からアメリカ人への集団的な「文化変容」（acculturation）を経ていた。ドイツ出身者が多いアメリカのユダヤ系指導層は，東ヨーロッパ出身者主導の政治的シオニズムに冷淡だった。シオニズムの民族主義は「二重の忠誠」問題を引き起こし，反ユダヤ主義を助長すると懸念した。イスラエルの地（パレスチナ）の外に住み同化するユダヤ人は「ディアスポラ（Diaspora，離散）」と呼ばれる。アメリカのディアスポラはユダヤ教の改革派が多かった。改革派の中にはアメリカこそ「新たな約束の地」とする教義が現れた。改革派のシナゴーグ（ユダヤ教会堂）は19世紀末までに，礼拝からシオン（エルサレム）への祈りの言葉を削除した。政治的シオニズムの父，オーストリアのジャーナリスト，ヘルツルが1897年にスイス・バーゼルで世界シオニスト会議を発足させた際，改革派はヘルツルの政治的シオニズムを拒否した。

米リベラル派の代表的エリート，ブランダイスも当初は自分のユダヤ性に関心を持たなかったが，シオニズムの書籍に接しパレスチナに入植したパイオニア（開拓者）の理想主義に感銘した。自分のリベラルな価値観と共通するものを見出した。シオニストの入植者は「ユダヤ人のピューリタン」に思えたという。ブランダイスは後に，シオニズムはピルグリムのインスピレーションの再現だと述べ，巡礼父祖の子孫であるアメリカ人がシオニストを「理解し同情するのは難しくない」と述べた。ブランダイスはアメリカでの政治的シオニズム受容に大きな役割を果たした[10)]。

同化志向のアメリカのユダヤ人はユダヤ難民のアメリカへの受け入れに

消極的だった。1933年にナチスがドイツで政権を握って露骨なユダヤ人差別が始まり，1938年のクリスタル・ナハト（水晶の夜）でユダヤ人が大規模に襲撃された後も，変わらなかった。けれども1942年後半，ホロコーストの想像を超える規模と残虐さが明らかになると，アメリカのユダヤ人社会の主導権はシオニストに移って行った。シオニストはユダヤ国家の基盤となるパレスチナへの移民推進に全力を挙げ，現地アラブ人との衝突を懸念する英国の委任統治政府と対立した。ローズヴェルト大統領の急死で1945年に副大統領から昇格したトルーマンら民主党リベラルは，ヨーロッパ各地の連合国収容所に集められたユダヤ難民の人道的処遇を重視した。難民のパレスチナ移住を訴えるシオニストに理解を示した。

▼反共自由主義

1948年のイスラエル独立宣言は，自由主義的な理念を掲げた。ユダヤ人国家の基礎は聖書の預言者が思い描いた自由，正義，平和にある，とした。宗教，人種，性別で差別されない平等や，宗教，良心，言語，教育，文化の自由をうたい，国連憲章の諸原則への忠誠を誓った[11)]。

ベングリオンは大戦中のアメリカ滞在でニューヨーク市立図書館にこもりアメリカの歴史や思想，制度などを集中的に研究し，アメリカ人の共感を得る方法を探った。イスラエル政府の前身ユダヤ機関（Jewish Agency）トップだったベングリオンは独立宣言の起草で中心的な役割を果たした。イスラエル独立宣言のリベラルな表現には，ベングリオンが研究したアメリカ思想などの語彙が反映している。民主党のリベラル派はシオニスト主流派の社会民主主義や進歩主義に共感した。アメリカのリベラル左派の若者はシオニストがパレスチナ各地につくったユダヤ人入植地キブツ（農業共同体）の財産共有，共同保育など共産主義的な理想主義に惹かれた。

スターリンのソ連もイスラエル独立を直ちに承認した。イギリス委任統治領パレスチナでのユダヤ人国家建国が，冷戦でソ連を敵視するイギリスの中東における影響力を削ぐことを期待した。シオニストにロシア語話者

や労組活動家が多いことも親ソ連への期待を抱かせた。イスラエルの独立戦争直後，近隣アラブ諸国軍が侵攻して始まった第一次中東戦争で，ソ連は衛星国チェコスロバキアを介しイスラエルに武器を供与した。

トルーマン政権はイギリスやフランスと共に，中東紛争の当事国イスラエル，エジプト双方への武器支援を控えた。トルーマンはパレスチナ難民問題の解決をイスラエル側に強く働きかけた。このためベングリオン首相は当初，親米を明確にしなかった。しかしアラブ・イスラーム諸国から追放されたユダヤ難民の大量移住でイスラエル経済が悪化し，アメリカの経済支援が不可欠となった。冷戦の深刻化でどっちつかずの態度を続けるのは困難になった。ベングリオンはソ連共産党に嫌悪感を持っていた。自由主義の超大国アメリカの支援が不可欠だと判断し，将来の対米同盟形成を目標に，イスラエルの立ち位置を西側陣営に定めていった。

自由主義の「普遍的価値」は第二次大戦中，ヒトラーのナチズムや天皇制国家の超国家主義に対して強調された。ローズヴェルトが1941年１月に発表した「四つの自由」はファシズムに対抗して言論の自由，信教の自由，欠乏からの自由，侵略の恐怖からの自由を掲げ，チャーチルとの同年８月の大西洋憲章に取り入れられ，国連憲章の基本的理念になった。戦後の冷戦期，自由主義の価値観は共産党独裁のスターリンのソ連や毛沢東の中国が掲げたマルクス・レーニン主義に対置された。「東側」の全体主義に対し，アメリカ主導の「西側」の自由主義の優位が盛んに説かれた。

アメリカの政治文化（political culture）においてリベラル・デモクラシーの自由主義的な価値観は中心に位置する。その源をたどると，イギリスの啓蒙思想を介して，聖書に基づくユダヤ・キリスト教の宗教伝統との関連が浮かび上がる。イギリスの名誉革命（1689年）を擁護しアメリカ独立革命に影響を与えたロックの『統治二論』（1690年）前半は，ヘブライ語聖書（旧約）からの引用であふれている。「福音書には政治形態の理想モデルがなかった」[12] ことと関係がありそうだ。アメリカの政治文化の中で，超越神の啓示に基づく宗教伝統と個人の自由を保障するリベラル・デモクラ

シーの価値観は重なり合う。聖書の宗教伝統とリベラルな価値観は西側の冷戦戦略と密接に関連した。「ユダヤ・キリスト教の伝統」という言葉自体，冷戦期のアメリカで無神論の共産主義に対抗する政治的，道徳的価値として強調された。

宗教，価値，戦略は絡み合う。宗教伝統と価値観を核とする政治文化は外交・安全保障の戦略に影響し，逆に冷戦や同盟など国際政治の利害関係が国内の政治文化に反映する。アメリカもイスラエルもその価値意識の源に聖書があり，両国は反共自由主義のイデオロギーを共有した。

3　政教分離と市民宗教

▼公共の宗教領域

アメリカの政治文化におけるユダヤ・キリスト教の宗教伝統とリベラル・デモクラシーの価値観の重なりを見るとき，宗教社会学者ロバート・ベラーが1967年の論文で提唱した「アメリカの市民宗教」（American civil religion）という概念が示唆に富んでいる。ベラーは民主党のケネディ大統領就任演説（1961年１月20日）を素材に，アメリカの宗教的伝統における神観念と政治的伝統における価値観の融合を指摘した[13)]。

ケネディ就任演説の宗教性に関するベラーの分析は，米リベラル派の政治文化と親イスラエル観の関連を考察するのにも有益だ。ケネディは対イスラエル関係を米英関係に比肩できる「特別な関係」と初めて呼んだ大統領である。凶弾に倒れたケネディはリベラル派にとって半ば神話化されたヒーローだ。ケネディは共和党のアイゼンハワー大統領（在1953−61）が拒んだイスラエルからの武器供与要求に応じ，両国の関係が戦略的な同盟に発展していく時代を開いた。

アメリカ合衆国憲法の第１修正は，国教樹立禁止条項（Establishment Clause）と宗教の自由条項（Free Exercise Clause）を定めている。アメリカでは国教の不在が宗派・教派の自由な活動を保障している[14)]。ベラーによると，政教分離を憲法で定めたアメリカの市民宗教は，キリスト教その

ものではない。だが国民の大多数が共有するキリスト教プロテスタンティズムの宗教伝統に基づく信条や価値，儀礼を伴う。市民宗教はキリスト教会から区別されるが，教会と並行して制度化されている。大統領が神という言葉を使えるのは，政治の領域に公共の宗教的次元（public religious dimension）があることを政教分離原則も否定できないからだという。個人の宗教信条，礼拝，宗教団体への参加は厳格に私的なことだと考えられる一方，宗教の公共的な次元，公共領域ではアメリカ人の大多数が共有する市民宗教の信条や象徴，儀式が存在する。大統領就任式は最も重要な儀式で，政治的権威を宗教的に正当化する。

▼理 神 論

ケネディは就任演説で神の名に冒頭２回，末尾に１回の計３回言及した。冒頭の言葉は「私は皆さんと全能の神の前で（before you and Almighty God）我々の建国の父たちが定めた厳粛な誓いと同じ誓いの言葉を述べました」「人間の諸権利は国家の寛大さによってではなく神の手から（from the hand of God）もたらされたとする革命的な信条のために我々の先祖が戦い，今もその信条のために世界中で争われています」。結びの言葉は「この地上において神の御業を真に担うのは我々でなければなりません（God’s work must truly be our own）」である。神の御業を地上で実現する義務とは，アメリカの精神的伝統の最深部を貫くテーマだ。

ケネディは神の観念に言及しただけで，モーセやイエスなど特定の預言者や教会には触れていない。ケネディは当時，アメリカ史上初のローマ・カトリックの大統領だったが，カトリック教会には触れなかった。それらはケネディの私的な信仰・教会で，大統領の公職とは関係がないからだ。公共の政治過程には異なる宗教・教派の人々も平等な資格で参加できなければならない。政教分離原則が私的，個人的な宗教領域を政治領域から隔離し，信教の自由を保障する仕組みになっている。市民宗教とキリスト教には機能的な役割分担がある。公務では個人的な信仰が何であれ，市民宗

教の典礼に従う。一方，個人の信仰や社会的行為の広大な領域が教会にゆだねられる。国家は教会を支配せず，教会も国家を支配しない。

ケネディが言及した「我々の建国の父たちが定めた厳粛な誓い」には合衆国憲法を守る義務が含まれる。アメリカの政治理論で主権は人民にあるが，究極の主権は神に帰せられる。大統領は憲法を通じて神への義務を負う。国民の意思自体が善悪の基準ではない。国民は間違えるかもしれない。大統領はより高次の神の基準で判断される。これが法の支配である。市民宗教はプロテスタント諸教派と啓蒙主義から生まれたが，カトリック系大統領の就任演説で市民宗教の信条が明確に表明されたことは，市民宗教が特定の宗派・教派を超えるユダヤ・キリスト教的な政治文化の伝統として根を下ろしているからだと考えられる。

ベラーは市民宗教という言葉をルソーの『社会契約論』4巻8章から取った。アメリカの政治文化の基調をなす市民宗教は，イギリスの植民地支配からの独立を戦い取った初代大統領ワシントン（1732–1799，在1789–97），続く第2代アダムズ（1735–1826，在1797–1801），第3代ジェファソンといった建国初期の大統領によって定められた。ワシントンの就任演説（1789年）には「宇宙を支配する全能の存在（Almighty Being who rules over the universe）」がアメリカ国民の自由と幸福（the liberties and happiness）を祝福するよう願う祈りで始まる。自由の聖火（the sacred fire of liberty）を絶やさず，共和制という政府のモデルを成功させる使命がアメリカ国民の手にゆだねられた，とワシントンは語った。ウィンスロップの「丘の上の町」の使命と責任を想起させる言葉だ。

ワシントンは全能の存在に言及したがイエス・キリストに触れなかった。この慣例は歴代大統領に受け継がれた。大統領就任式のような厳粛な儀式ではワシントンやケネディと同様に神への言及がある。市民宗教は有神論だが，キリスト教の三位一体（トリニティ）論を否定するユニテリアン派や超自然的奇蹟を信じない理神論（自然神論，自然宗教）の色彩を帯びる。超絶主義（transcendentalism）で知られる19世紀前半の思想家エマソン

（1803–1882）は一時ユニテリアン派の牧師だった。ベラーの市民宗教という語の出典『社会契約論』の著者ルソーも理神論の影響を受けた。

4　アメリカの聖典，聖者

▼国民のアイデンティティ

アメリカの市民宗教には知識人，教養人が好む合理的な理神論の要素がある。しかし市民宗教が単なる理神論だったなら，アメリカの民衆一般に共有されなかっただろう。ボストンやニューヨークの知識人の枠を超えられなかったに違いない。理神論の神は宇宙の創造者だが，人間の精神や道徳に介入しない。だがアメリカ建国の父たちの神は古代ヘブライ人をファラオの専制から解放し約束の地に導いた旧約聖書の神だ。その神がアメリカ人を選び，特別に配慮して「約束の地」「新しいイスラエル」であるアメリカの歴史に介入した，と考えられた。建国の父たちは，アメリカの民衆が現実に生きて戦った植民から独立革命までの歴史を，古代イスラエルの神と選民の物語や聖書のさまざまな象徴と重ねて語った。

市民宗教の初期の象徴システムはヘブライ的だった。独立革命に大きな影響を与えた聖書の物語は旧約の『出エジプト記』だ。ファラオの専制から自由と繁栄の待つ「約束の地」へ向け脱出するこのエクソダスの物語を17世紀のピューリタンが反復した。その物語が独立革命期の建国の父たちによって重ねて反復され，アメリカの建国物語（founding narrative），建国神話（founding myth）となっていった。アメリカ独立宣言でジェファソンが暴君と糾弾した英国王ジョージ３世（在1760–1820）は，エジプトのファラオに擬せられた。独立戦争の司令官ワシントンは，神に選ばれ古代イスラエルの民を隷属から解放した預言者モーセだ。すべての国々の光となる新しい社会，共和国を確立するため，神は約束の地アメリカに人々を導いたという物語・神話が，アメリカ人のアイデンティティを形作った。

独立宣言が発表された1976年７月４日，大陸会議は元老格の科学者・文筆家・政治家であるフランクリン（1706–90）や弱冠33歳で独立宣言の起

草を任せられたジェファソンにアメリカ合衆国の国璽（seal）の図案を考えるよう指示した。フランクリンは，モーセが手を挙げて紅海を二つに分け，戦車上のファラオが海にのまれる『出エジプト記』14章21−23節の場面を選んだ。独立派が好んだ「圧政者への反乱は神への服従」（Rebellion to tyrants is obedience to God）という言葉も刻むよう提案した。ジェファソンもやはり『出エジプト記』第13章末尾の，主（the Lord）が荒れ野（wildness）を行くイスラエルの民を昼は雲の柱（by day in a pillar of a cloud），夜は火の柱（by night in a pillar of fire）となって導くという聖句に基づく図案を示した[15)]。

建国期のアメリカでは旧約聖書の民ユダヤ教徒も関心の的だった。アメリカ先住民は古代ユダヤ人の子孫だとする「ユダヤ・インディアン説」（Jewish-Indian theory）が流行した。第２代大統領アダムズは，第３代大統領ジェファソンと長い不和の後1812年に文通を再開し，ジェームズ・アデェア著『アメリカ・インディアンの歴史』（1775年）を話題にしている。２人の元大統領はユダヤ・インディアン説を支持はしなかったが，ジェファソンは地元ヴァージニアの先住民に関心があり，インディアンの言語は旧約聖書のヘブライ語が起源だとする説に興味を持った[16)]。

ジェファソンは古代イスラエル人の末裔や神の言葉ヘブライ語に関心を持つなどキリスト教ヘブライズムの影響を受けていた。宗教史家ゴールドマンは「市民宗教の歴史は，アメリカ人は神の新しいイスラエル，新たな選民だとの信念の歴史だ」と言う。国家や国民を統合するには建国神話という宗教的起源が必要である。神に選ばれた民の物語はイスラエル人やアメリカ人にとどまらず，ほとんどの国民，ほとんどの民族にあると言えるだろう。ナショナル・アイデンティティを研究する歴史社会学者アントニー・スミスは，旧約の神と選民のイメージに触発されてアイデンティティを形成した国として，アメリカやイスラエルのほかオランダ，イングランド，フランス，ロシア，アルメニア，エチオピア，南アフリカ，ロシアなどを例示した。スミスは日本の８世紀の記紀神話編集や18世紀以降の

国学運動を，キリスト教，イスラーム教，仏教など世界の救済宗教とは別系統で生じた「選ばれた民」観念によるアイデンティティ形成の例として挙げている[17)]。

▼信仰復興運動

アメリカの市民宗教はキリスト教の教派を超える「共和国の宗教」だ。独立宣言は憲法の権利章典と共に市民宗教の「聖典」（Scripture）である。ワシントンの就任演説や告別演説も聖典の一つとされる。市民革命と立憲民主主義の聖典が，ヴァージニアの大地主や富豪，マサチューセッツやニューヨークの聖職者や教養人の枠を超え，広くアメリカの民衆を情緒的に共振させることができたのは，独立革命の前に聖書信仰を核とするナショナル・アイデンティティの形成が準備されていたからだと考えられている。独立革命から１世代遡る1740年ごろ，キリスト教会の平信徒の間で「大覚醒」（Great Awakening）と呼ばれる福音主義の信仰復興運動（リバイバリズム）が燎原の火のように広まった。

神権政治的なニューイングランドの牧師は当初，イギリスの名門ケンブリッジ大学出身者が多かった。ハーバード大学やエール大学でラテン語，ギリシャ語，ヘブライ語など古典語の教育を受けた牧師が続いた。死の恐怖や不安が日常的な植民地社会で生きる一般の信徒は，高学歴の牧師の難解で退屈な説教，熱気のない教会に飽き足らなかった。民衆は「魂の救い」を求め，わかりやすくドラマチックに福音を説くスター的才能のある牧師の説教に熱狂した。イギリスから繰り返し訪米した牧師ホイットフィールド（1714–70）が有名だ。信仰復興の福音主義的な説教は屋内でも野外でも行われた。興奮し，われ先に悔い改めの「回心」を叫ぶ人々，地獄の恐怖で失神する者。当時の記録に残るリバイバリズム集会の有様はさながら熱狂的なファンが殺到するロックコンサートのようだ。マサチューセッツ州ノーサンプトン教会のエドワーズ（1703–58）が1741年に近隣の教会で行った「怒れる神の手の内にある罪人」は，信徒が恐怖でうめき出し大混

乱になったことで歴史に残っている。ホイットフィールドは英オックスフォード大学で学んだメソジスト派の伝道者，エドワーズはエール大学出身のカルヴァン派で当時最高峰の知性だったが，二人とも理性や知識よりも信仰心の強さや感動を重視した。大覚醒運動は理性より啓示，精霊，聖書預言，奇蹟など非合理的な要素を重視して民衆に広がった[18)]。

イギリス植民地時代のアメリカは18世紀前半の大覚醒を経てマサチューセッツやヴァージニアといった邦（独立後の州）の垣根を超えるアメリカ人としての国民意識を醸成し18世紀後半の独立革命，合衆国憲法制定へと突き進んでいった。その過程で共和国の国民の疑似的な宗教，ナショナル・アイデンティティの核となる公共的な市民宗教が形成されていった。

▼リンカンとイエス

アメリカの市民宗教は黒人奴隷解放をめぐる南北戦争（1861–65）で死，犠牲，追悼，再生といった新たな宗教的次元を獲得した。それは南北戦争時に大統領を務めたリンカン（1809–65）の人生と死に象徴される。「人民の人民による人民のための政府」（the government of the people, by the people, for the people）で終わるゲティスバーグ演説も市民宗教の聖典になった。戦死者を追悼するゲッティスバーグ国立墓地は市民宗教の神聖な記念碑だ。リンカンは暗殺される41日前の1865年３月４日，２回目の大統領就任演説でアメリカ国民に呼びかけた。「誰に対しても悪意をいだかず，すべての人に慈愛をもって，神がわれわれにお示しになる正義を固く信じて，われわれの始めた事業を完成するために，努力しようではありませんか。国民の傷口を包み，戦闘に息絶えた者，後に残された未亡人と子供に手を差し伸べるために，努力しようではありませんか。わが国民の間に，そしてすべての諸国民との間に，公正かつ恒久的な平和を成し遂げ，それを慈しむために，あらゆる努力を払おうではありませんか」[19)]。暗殺で「殉教」したリンカンのイメージは十字架の聖者イエスと重なった。「誰に対しても悪意をいだかず，すべての人に慈愛をもって」（With malice

toward none with charity for all）という聖句のような言葉を含むこの演説は，アメリカの市民宗教の中で新約聖書に擬せられる新たな聖典となった。

リンカンはゲッティスバーグ演説の１カ月半前の1863年10月３日，「感謝祭を行う旨の布告」を出した。感謝祭（Thanksgiving Day）の起源はピューリタンのプリマス植民地にある。1620年11月にメイフラワー誓約で政治的共同体をつくったピルグリムズを待っていたのは，川も凍り付くニューイングランドの厳しい冬だった。ほどなく約半数が病死した。先住民の助けでトウモロコシ栽培などを始め，翌1621年の秋に最初の収穫を得た。神と先住民に感謝する祝宴が３日間続いた。インディアン約90人を招き野生の七面鳥や鹿の肉を振る舞った。ニューイングランド地方で続いたこの風習をワシントンが1789年11月に全米の祝日に格上げし，リンカンが11月の最終木曜日を連邦の法定休日として制度化した。リンカンは南北戦争で分断され傷ついたアメリカ人の心を感謝の祈りで癒し，再び統合したいと願った。

感謝祭を定めたリンカンは「わが国が末永く存続してゆき，しかも自由はいよいよ増進してゆくことを期待しうるのである。このような偉大なことは，人間の思慮・智慧によって案出されたのものではなく，人の手によって成しとげられたものではなかった。これらのものはいと高き神の恵みの賜である」と語った[20)]。自由と神というアメリカの市民宗教のテーマが繰り返されている。21世紀のアメリカ人も毎年11月末の感謝祭の日，家族で食卓を囲み七面鳥やパンプキンを食べながらアメリカ建国神話の起点プリマス植民地のピューリタンに思いをはせる。感謝祭はピルグリムズの労働と感謝を思い浮かべる市民宗教の祝日だ。感謝祭にかかわる聖者たちは建国神話の巡礼始祖，市民宗教のモーセであるワシントン，イエスであるリンカンである。感謝祭の歴史にピューリタンの宗教伝統に発するアメリカ市民宗教の一貫した流れを見ることができる[21)]。

5　『エクソダス』広報戦略

▼建国物語の類似性

アメリカの市民宗教は聖書文化の伝統と自由主義的な啓蒙思想を融合して生まれた。市民宗教の象徴は『出エジプト記』などが示す「約束の地」の解放と自由のイメージだ。イギリス国教会の迫害を逃れて北米に入植したピューリタンは新世界の荒野に神の国「新しいイスラエル」の建設を目指した。建国の父祖たちは独立革命で共和国を誕生させ，神の御業を実現する使命感を核に国民のアイデンティティを形成していった。

一方，現代イスラエルを建国した政治的シオニストは，ホロコーストで極まった旧大陸ヨーロッパのユダヤ人迫害を逃れ，父祖の「約束の地」パレスチナに入植した。シオニストはイギリス委任統治政府の植民地支配や厳しいユダヤ移民制限，「先住民」であるアラブ人との闘争を経て武力で独立を勝ち取り，ユダヤ民族国家を再興した。

アメリカとイスラエルの建国物語は共に旧約聖書のエジプト脱出物語と重なる類似性がある。自らを神の選民と自負する両者の建国神話は似通っている。「約束の地」は進歩主義のリベラル派が目指す理想を象徴する。アメリカのリベラルによるイスラエル支持の基底に両国の自画像の類似性がある。キリスト教徒が大多数を占めるアメリカ人から見ると，イスラエルにはイエスが福音を説き始めたガリラヤ湖畔，十字架刑と復活の地エルサレムなどキリスト教聖地が随所にある。教会や日曜学校で子供のころから親しんだ聖書物語の舞台だ。

双方の建国物語に欠けているのは「約束の地」の先住民から土地を奪取した負の歴史である。アメリカの場合は北米インディアン，イスラエルの場合はパレスチナ・アラブ人だ。イスラエルの場合，ファラオのエジプトに擬せられるイギリスは1948年にパレスチナ委任統治を終え，イスラエルが独立戦争と呼ぶ第一次中東戦争で戦ったのはエジプト，ヨルダン，シリア，レバノン，イラクのアラブ諸国軍とパレスチナのアラブ人武装組織

だった。イスラエルは，パレスチナ難民の大半はアラブ人指導者の指示や混乱のため自ら家を捨てて逃げた人々だと主張した。故郷を奪われたパレスチナ人約70万人の脱出の物語は語られなかった。イスラエル軍がアラブ住民追放（ダレット作戦）をベングリオン首相兼国防相の命令で実施した事実はベニー・モリスやイラン・パペ，アヴィ・シュライムといったイスラエルの「新しい歴史家」と呼ばれる研究者・作家が詳細に示した[22)]。

イスラエルは超大国アメリカの好意と支援を得るため，両国の建国の歴史の類似性を強調した。国益を最優先する広報文化外交（public diplomacy）だ。ユダヤ人のパレスチナ入植は『出エジプト記』やアメリカ建国史と同じように，神に導かれ自由を求める物語だ，とするプロパガンダに力を入れた。アラブ人が住むパレスチナを「無人の地」「未開の辺境（フロンティア）」と呼び，アメリカ西部のフロンティアのイメージと結びつけた。シオニストの入植者は米西部の勇敢なパイオニア（開拓者）のように描かれた。アラブ人キリスト教徒の存在は黙殺した。

▼プロパガンダ

アメリカの大衆をターゲットとしたプロパガンダで圧倒的な成功を収めたのがユダヤ系アメリカ人作家レオン・ユリス（1924–2003）のベストセラー小説『エクソダス』（*Exodus*，1958年）だ。タイトルは旧約の『出エジプト記』そのものである。『エクソダス』は1946年にパレスチナ沖の地中海で起きたユダヤ人難民船「SSエクソダス号」のイギリス海軍駆逐艦による拿捕事件を下敷きにしている。実際に起きたアメリカのシオニストによるこの難民船の航海自体，国連でのパレスチナ問題の討議でユダヤ人国家樹立を有利にするプロパガンダが目的だった。パレスチナへのユダヤ移民を厳しく規制するイギリス当局の「非人道性」「残酷さ」を国際社会に訴えるのが目的だった。イギリス当局が拿捕の際，乗員３人を射殺し，さらに乗客の一部をドイツに送還する愚挙に出たため，国際的な非難が巻き起こり目的は十二分に達成された。

小説家ユリスはこの事件を素材に，活劇と恋を軸に展開する約600頁の長編小説を執筆した。アラブ人が多数派の英委任統治領パレスチナにユダヤ人国家イスラエルを建国する複雑な対立と抗争の歴史を，アメリカの大衆に受ける単純な善（シオニスト）と悪（イギリス，ナチス，アラブ人）の図式で巧みに織り合わせた。

軍事と直結する宇宙開発でアメリカがソ連に先を越された時代だ。冷戦期の大衆文化は共産主義の「東側」を悪，アメリカ主導の「西側」を善とするマニ教的な善悪二元論に覆われていた。欧米と中近東の利害が複雑に絡み合った歴史を，ユリスはアメリカ人におなじみのフロンティアの西部劇や聖書の約束の地の物語に変えた。イスラエルの建国神話を見事にアメリカ化した。『エクソダス』はイスラエル人のための小説ではない。ユダヤ人差別が残るアメリカで，支配的なキリスト教徒やシオニズムに反対する同化ユダヤ人エリートの読者をターゲットに，シオニズムを正当化し賛美する物語だ。ユリスは正義感にあふれタフで強い男性シオニストをヒーローに据えた。ユダヤ人は弱々しい無抵抗の犠牲者というステレオタイプのイメージを一掃することが執筆の動機だった。

ユリスの父ウイリアムは現在のベラルーシで生まれ，第一次大戦後パレスチナで数か月過ごした。しかし理想社会を夢見るマルクス主義者のウイリアムはシオニストの実践的でタフな活動について行けず，アメリカに移り住んだ。同じくユダヤ系の妻との間に米ボルティモアでユリスが生まれた。ユリスの名前レオンは，レーニンと共にロシア革命に参加したウクライナのユダヤ人革命家レオン・トロツキーから父が命名した。ユリスは高校中退後，父のような理想主義，急進主義に惹かれるユダヤ人と，アメリカの主流であるローズヴェルト大統領支持のリベラルの間で揺れ動き，心理的に不安定な時期を過ごした。

日本軍の真珠湾攻撃がその状態に終止符を打った。ユリスは海兵隊に志願し，太平洋のマーシャル諸島やギルバート諸島で日本軍との戦闘に参加した。ユリスの戦いは，アメリカ社会の反ユダヤ主義と自身のコンプレッ

クスを克服する闘いでもあった。理想や言葉だけで現実社会での達成や成功と縁のなかった父の人生を超えていく戦いだった。ユリスは軍隊で，行動することの価値を見出した。小説で兵士の勇敢な行動を描写し賞賛した。処女小説『バトル・クライ』（1953年）はガダルカナル島で日本軍と戦うユダヤ人アメリカ兵の超人的な活躍を描いた。『バトル・クライ』は大成功を収め，ユリスは有望な新進作家として注目された。ユリスはハリウッドの西部劇『OK 牧場の決闘』（1957年）の脚本を任され知名度を上げた。ユリスに目を付けたのが映画会社 MGM の副社長ドール・シャリ―だった。映画会社の経営者は大半がユダヤ人だが，当時は自らの宗教を隠しユダヤがテーマの映画製作を避ける傾向があった。1950年代前半に映画監督や俳優を含む著名人が共産主義者のレッテルを貼られたマッカーシズム（赤狩り）が猛威を振るった後だ。シャリーは進歩派でユダヤ教正統派だった。ユリスは脚本を MGM と，小説をランダムハウス社と契約した[23)]。

シオニストの物語をアメリカ化した『エクソダス』は飛ぶように売れた。ニューヨーク・タイムズ紙のベストセラーリストに80週以上とどまった。両国の建国物語の類似性は『エクソダス』が出版されるまでアメリカの大衆にほとんど知られていなかった。『エクソダス』は1960年，ハリウッドのオットー・プレミンジャー監督が映画化し，３時間28分の大作は日本でも『栄光への脱出』のタイトルで上映された。映画は小説の詳細な建国史を簡略化し，シオニスト賛歌を抑制したが，ポール・ニューマン演じるシオニスト特務工作員の男性ヒーロー，アリ・ベンカナンは民族の解放を求めて戦う勇敢なパレスチナの開拓者だ。「カナン」は旧約『出エジプト記』で「イスラエルの地」を示す。ベンカナンはカナンの息子という意味である。アリ・ベンカナンは大戦後，地中海キプロス島の難民キャンプに収容されていた多数のユダヤ人を『エクソダス号』に乗船させパレスチナに不法移民させる任務を遂行する。難民キャンプを訪れたプロテスタントの美しいアメリカ人女性キティ・フレモントがアリと恋に落ちる。キティは聖書に記されたジャズリール渓谷（エズレル平野）のキブツに移り住む。政治的

シオニストのユダヤ人男性とキリスト教徒の白人アメリカ人女性の恋は，ユダヤ・キリスト教文化の一体性を象徴する。アリの妹はじめ映画に登場する主要なユダヤ人女性は白い肌，青い目の女優たちが演じた。

▼取材協力による誘導

イスラエルは1950年代，ユダヤ人国家への好意的なイメージをアメリカで広める必要に迫られていた。1950年の米英仏三国宣言（Tripartite Declaration）で，アメリカはイスラエルへの武器供給を事実上禁じた。共和党のアイゼンハワー大統領はイスラエルからの武器供与の求めに応じなかった。イスラエル軍は1953年，ヨルダン川西岸のキブヤ村を攻撃して破壊，パレスチナ人69人を殺害した。犠牲者の３分の２が女性と子供だった。国際的非難が巻き起こり，国連安全保障理事会はイスラエル非難決議を採択した。イスラエルの対外イメージは悪化した[24)]。「キブヤ虐殺事件」の実行者はアリエル・シャロン少佐の特殊部隊101だった。シャロンは1956年のスエズ動乱（シナイ戦争）でスエズ運河付近まで戦車部隊を突進させた。アイゼンハワーはで英仏と共謀しエジプト領シナイ半島を占領したイスラエル軍部隊に1949年の停戦ラインまで撤退するよう求めた。イスラエルは従うほかなかった。アメリカのユダヤ人は当時も全米人口の３％に満たないマイノリティだ。民主党支持が多数派で共和党の大統領には影響力を持たなかった。アイゼンハワーは1952年，全米の得票数の55％を獲得して当選したが，ユダヤ系有権者でアイゼンハワーに投票したのは36％。ユダヤ系は1940年と1944年の選挙でいずれも90％が民主党のローズヴェルトに投票した。当選が危ぶまれていたトルーマンにも75％が投票した。アイゼンハワーは第二次世界大戦のヨーロッパ戦線で連合国最高司令官を務めた英雄だ。ユダヤ系の投票行動を気にする必要はなかった[25)]。

アメリカのベストセラー作家ユリスの『エクソダス』執筆計画はイスラエルにとって渡りに船だった。ロサンゼルス総領事が1956年３月，ベングリオン首相側近のパールマン首相府広報局長に「注目する価値がある」と

公電を打った。ユリスは同年，執筆のための調査旅行でイスラエルに８か月滞在した。エルサレムやテルアビブはもとより，南部ネゲブ砂漠から北部ガリラヤ地方まで約２万キロを走破したという。運転手を務めたのはイスラエル外務省のイラン・ハルタブだった。

ハルタブは入念な旅程を計画し，ウリスを政治家や将軍に次々と引き合わせた[26)]。アメリカからの武器密輸にかかわったテディ・コレック首相府長官，英軍で諜報活動をした軍情報局高官ハイム・ヘルツォーグ，シオニスト支持の英将校ウィンゲートから訓練を受けた「独眼の将軍」モシェ・ダヤン参謀総長，軍人考古学者イガル・ヤディン，与党マパイの有力政治家ゴルダ・メイヤ，イガル・アロンらそうそうたるメンバーがユリスのインタビューに応じ，シオニストの建国物語を語った。後にコレックはエルサレム市長，ヘルツォークはイスラエル大統領になる。ダヤンは国防相として1967年の第三次中東戦争の大勝利をもたらした。ヤディンは32歳の若さで参謀総長に抜擢された後，考古学の研究に転じた。紀元１世紀にローマ軍に包囲され全滅した死海沿岸のマサダ砦跡の発掘や，世紀の大発見とされる死海文書発掘に携わった異才だ。ユリスは聖書に関するヤディンの知識に全幅の信頼を置いた。シオニストとして地下活動歴のあるアロンは『エクソダス』の主人公アリ・ベンカナンのモデルとされる。アロンはアリの恋人キティが水浴するガリラヤ湖畔のキブツ「ギノサール」のメンバーだった。第二次大戦中はシオニスト主流派の防衛組織ハガナの突撃隊パルマハで活躍し，シリアやレバノンでの秘密情報・工作活動を統括，パルマハ司令官（1945−48）を務めた。ユリスはユダヤ人に協力したエルサレム近郊アブゴーシュ村のアラブ人や，ガリラヤ地方のイスラーム教異端ドルーズ派からも話を聞いて，小説の素材とした。

ユリスは首相府のコレック長官やパールマン情報局長に小説の草稿を見せ，コメントを求めた。ユリスはシオニストに共感しながらも，イスラエルに移住せずアメリカで快適に暮らすディアスポラ（離散）のユダヤ人だ。ユダヤ人の祖国イスラエルへの負い目も感じていた。イスラエル政府は特

別待遇で応じた。ユリスが地中海岸の高級リゾート，ヘルツェリアの住宅を望んだ際，首相府が市長に働きかけ土地取得を法的に可能にした。食品輸入でも関税免除の超法規的措置を取った。イスラエルは対米広報文化戦略におけるユリスの小説の価値を十分に認識していた。イスラエル側は小説の内容がイスラエルの建国物語に沿うように働きかけたが，直接的な介入はカモフラージュした。作家の独立性の装いを損なわず，対米プロパガンダが最大の効果を上げるよう気を配った。

▼映画を全面支援

イスラエルはオットー・プレミンジャー監督の映画『エクソダス』製作に国を挙げて協力した。イスラエルのロサンゼルス総領事は1958年10月，小説『エクソダス』の映画化権を得たユダヤ系のプレミンジャー監督がイスラエルを撮影の候補地の一つとして検討していることを知ると，経済的にも好機だと首相府に知らせた。イスラエル政府は大ヒットが確実なハリウッド超大作の内容が自国に有利になるよう監視したかった。映画を観たアメリカ人観光客が押し寄せ貴重なドルを落とすことも期待した。領事は翌年「プレミンジャーは気難しい。独裁的で，怒りっぽく，助言を好まない」と本国に報告，注意を促した。監督はイスラエルの温暖で乾燥した気候，変化に富んだ地形，数々の史跡に惹かれる一方，撮影施設の後進性が心配だった。プレミンジャー監督はオーストリア＝ハンガリー帝国ブコヴィナ地方（現ウクライナ西部）の出身だ。イスラエル政府はプレミンジャーのウィーン時代の旧友ワイスガル（ワイツマン科学研究所長）にも働きかけさせた。ベングリオン首相から閣僚，撮影予定地のエルサレムやハイファの市長に至るまで懸命にプレミンジャーを説得した。

撮影チームは1960年３月27日から６月３日までイスラエルに滞在した。各国からの取材記者40人もイスラエル入りした。イスラエル産業貿易省傘下の映画産業後援団体が撮影場所に関するプレミンジャーの難しい要求を調整し，実現していった。ハイファ港はまる一日閉鎖された。イスラエル

北部アトリット軍基地は，キプロス島のユダヤ難民キャンプに見えるよう作り変えられた。国連総会が1947年11月，ユダヤ人国家樹立を認めるパレスチナ分割決議を採択したニュースに大群衆が歓喜するシーンでは，約２万人のエキストラがテルアビブの広場に集められた。アメリカ人俳優や撮影関係者をもてなすパーティや晩さん会が開かれた。

イスラエル当局者は映画の脚本に関する多くのコメントや助言，提案を監督に伝えた。映画の内容がベングリオン首相の与党マパイの立場から外れないようにするためだ。プレミンジャーは助言や提案の一部を受け入れた。改編は脚本の約20％に及んだという。プレミンジャーは，与党マパイの旧軍事組織ハガナの活躍を意図的に強調したのでは，との見方に，あくまで芸術性を追求した，と反論した[27)]。

▼オリエンタリズム

小説『エクソダス』出版から映画が1960年末ニューヨークで初上映されるまでの２年半にユリスの原作は約400万部売れた。販売部数は20年間で2,000万部以上に達した。小説と映画の『エクソダス』はイスラエル政府の期待を超えて親イスラエルのアメリカ世論形成に貢献した。『エクソダス』はアメリカの大衆にイスラエルへの好意的イメージを抱かせる上で決定的な役割を果たした。自由と正義のために戦う進歩主義的なシオニズムの物語は，アメリカのリベラルに歓迎された。小説や映画の力で歴史をアメリカ国民共通の記憶に変えた点で，『エクソダス』は南北戦争をアメリカ人共通の過去に変えた『風と共に去りぬ』に匹敵するとも言われる。

ニューヨーク大学の英文学教授だったパレスチナ人批評家エドワード・サイードはパレスチナの第二次インティファーダ（反イスラエル闘争）が武闘化した2001年９月，米アラブ反差別委員会（ADC = Arab American Anti-Discrimination Committee）の世論調査に基づき，アメリカ人のほとんどがパレスチナ人についてもイスラエルの軍事占領についても何も知らないと指摘し「アメリカ人の考えに支配的な影響を及ぼしている語りのモデ

ルは，いまだにレオン・ユリスの小説『エクソダス』であるらしい」と書いた。サイードは「イスラエルのプロパガンダがあまりにも奏功してきた」ために「パレスチナ人は自分自身の物語を通して理解されることがない」と嘆いた[28)]。

サイードは，フランスの哲学者フーコーの権力論を援用し，東洋（オリエント，非西洋世界）を植民地主義的に再構成し支配・管理するための西洋の知の様式を，オリエンタリズム（Orientalism）と名付けたことで有名だ。オリエンタリズムは想像力によって生産され，具体性，現実性を欠いた観念の複合体とされる。東洋人は自分で自分を代表することができず，西洋人に代表してもらうほかない[29)]。『エクソダス』について，サイードが「オリエントに関するヨーロッパ的表象」と呼んだ文化＝政治現象を「パレスチナに関するシオニスト的，アメリカ的表象」と言い変えて考察することもできるだろう。

お　わ　り　に

オバマ元米大統領の回想録のタイトルはずばり『約束の地』である。『出エジプト記』の専制からの解放のイメージは現在もリベラルなアメリカ人の心に生きている。アメリカのリベラル派は建国初期のイスラエルを，ホロコーストの灰の中から立ち上がり，古き良き時代のアメリカのパイオニア・スピリット（開拓者精神）を共有する活力にあふれた国と見た。保守的なアラブ諸国の脅威にさらされながらアメリカ的価値観に忠実な中東の小国と見た。イスラエルは男女徴兵制など国防上の国民の義務と市民的自由のバランスを保つ模範的な市民兵（citizen soldiers）国家と見られていた。ベトナム戦争で苦しむアメリカと違い，国防・軍事と自由主義を両立できる民主国家と評価された。

一方，イスラエルは超大国アメリカから好意的に見られるよう懸命に努力した。米リベラル派の親イスラエル観はアメリカのノスタルジアとイスラエルのプロパガンダの産物である。

1967年の第三次中東戦争（六日間戦争）の後，アメリカのリベラル左派はイスラエルを否定的に見始めた。穏健なリベラル主流派はパレスチナ人への差別，軍事占領などを当初，暫定的な現象と見たが，1973年の第四次中東戦争（ヨムキプール戦争），右派リクードのベギン首相とシャロン国防相による1982年のベイルート侵攻，1987年からの第一次インティファーダ（反イスラエル闘争）などを経て，自由で民主的な国というイスラエル像は修正されていった。アメリカ国内の宗教地図が1970年代を境にリベラルな主流派（メインライン）から保守的な福音派（エヴァンジェリカル）に塗り替わるに従い，米プロテスタントとイスラエルの関係も変化し複雑化した。アメリカ人大衆にとってのイスラエルのイメージは，リベラルなエクソダスから，保守的福音派のミレニアム（Millennial，千年王国）の黙示録的イメージに変わっていった。

本稿でタイトルにも使用した「市民宗教」という用語の妥当性については今後検討を続ける（註２，註13参照）。

本稿校正の最終段階で小説『エクソダス』の邦訳『エクソダス　栄光への脱出』（河出書房，1961年）の存在を知った。不明にも邦訳がある可能性をまったく考えていなかった。訳者の犬養道子（1921−2017）さんの名前を見て驚いた。道子さんは聖書関連の多数の著作に加え，1932年の五一五事件で暗殺された犬養毅首相の孫としても知られる。海軍急進派の将校が「話せばわかる」と諭す犬養首相を射殺した現場に居合わせていた。私が1994年に共同通信社のエルサレム支局に赴任した直後，道子さんは雑誌の取材でイスラエルを訪問された。エルサレムのノートルダム聖堂付きホテルでの個人的な会食に招いていただいた。「旧約聖書と新約聖書のどちらが重要なんですか？」とお尋ねすると「そういう質問をすること自体が何もわかっていないということなのよ」と厳しく優しく教えていただいたことなどを懐かしく思い出す。私は道子さんが70年前に邦訳された洋書の研究に，それと知らずに取り組んでいたわけだ。自分の不明を恥じると共に，奇縁と学恩を感じる。幽冥境を異とするのは人の世の定めだが，言葉を交

わせないのは残念だ。

註

1）　船津靖「米大使館エルサレム移転と福音派の黙示的終末論」（『修道法学』2021年２月）で英国起源のディスペンセーション主義と呼ばれる前千年王国説に立つ黙示的終末論を取り上げた。

2）　船津靖「米イスラエル特別関係の形成と「約束の地」」（『修道法学』2021年９月）。本稿は同論文の「３「約束の地」のリベラリズムと入植・占領」（p. 77–84）のテーマを掘り下げた。

3）　Sanger, *The Perfect Weapon*

4）　サイード『オリエンタリズム』（下）271頁

5）　両国の「特別な関係」を福音派のキリスト教シオニズムに加えリベラルな価値の共有や外交安全保障も含め包括的に扱った学術書はまだ少ない。エリザベス・スティーブンス『アメリカの対イスラエル政策』（2013年版，未邦訳）は「政治文化」を軸に宗教や価値観に加え国益，経済など国際政治の同盟分析も盛り込んだ。エイミー・カプラン『我らがアメリカのイスラエル』（2018年，未邦訳）は宗教文化の分析が主体だが，フロンティアなど建国神話も取り上げた。デービッド・タル『同盟の形成』（2022年，未邦訳）は外交史中心だが政治文化も踏まえている。

6）　Goldman, *God's Sacred Tongue*, p. 2

7）　斎藤眞「契約による社会形成」（『アメリカを探る』第１章）12–24頁。同論文は研究の進展によるピルグリムズの非神話化を前提に，プリマス植民地第２代総督ブラッドフォード（1590–1657）の『プリマス植民地について』を資料として，分離派ピューリタンと投資会社の募集に応じた雑多な「よそ者」という他者同士の集団が反乱や分裂を経た後，生存のため契約による政治社会形成に合意した意義を強調した。本稿は移住の主導者がピューリタンで，契約のモデルが分離派信徒と神の契約に基づく教会契約とみられることなど宗教的背景にあらためて注目した。

8）　ジョンソン『アメリカ人の歴史１』56–60頁

9）　*New York Times*, 1989.1.12. Transcript of Reagan's Farewell Address to American People

10）　サッカー『アメリカに生きるユダヤ人の歴史』（上）446–467頁

11）　*Historical Dictionary of Israel*

12）　スミス『ナショナリズムとは何か』208頁

13）　Bellah, "Civil Religion in America". ベラーは「市民宗教」という用語が混乱を招いたとして「聖書的伝統（biblical tradition）」と「市民的共和主義（civic repub-

licanism)」という二つの概念で表している。藤本，2009年，28–31頁，246–249頁，ベラー，1991年，32–37頁，266–283頁。本稿は聖書的伝統に重点を置き，学史上画期をなした市民宗教の語を使用した。

14） 樋口範雄『アメリカ憲法』524–526頁

15） Cherry, *God New Israel*, p. 65. フランクリンとジェファソンの国璽図案は最終的には採用されなかったが，キリスト教ヘブライズムの影響を示している。コネティカット州ニューヘブンに1701年創立されたエール大学が1736年に作った大学の記章にはヘブライ文字で「光と完全」と刻まれていた。当時，最高の教養人と尊敬されていた同大のエズラ・スタイルズ学長（1727–95）は学長就任演説をヘブライ語で行った。同学長は「神のアメリカのイスラエル（God's American Israel)」と述べたことでも知られている。

16） Goldman, *God's Sacred Tongue*, p. 1–2. 古代イスラエルの「失われた十部族」（the ten lost tribes）の伝承が背景にある。紀元前6世紀前半に古代ユダ王国（南王国）の都エルサレムを新バビロニアが破壊したのが有名なバビロン捕囚だ。それに先立つ紀元前8世紀後半，古代イスラエル王国（北王国）がアッシリアの侵攻で滅亡した。北王国を構成したイスラエル十部族（支族）の行方は歴史の闇に消えた。この子孫探しで現ヨルダン川西岸山間部に残るサマリア人はじめ，エチオピア人，アフガニスタンのパシュトゥン人などさまざまな候補が挙げられてきた。北米インディアンもマオリ族や日本人などと共に候補の一つだった。ジェファソンは『ヴァージニア覚え書』にインディアンに関する詳細な記録を残した。

17） スミス『選ばれた民』57–215頁

18） 森本あんり『反知性主義』31–94頁，ホーフスタッター『アメリカの反知性主義』49–102頁

19） 訳文はピラード，リンダー，堀内一史・犬飼孝夫・日影尚之訳『アメリカの市民宗教と大統領』134–135頁。原文は "With malice toward none with charity for all with firmness in the right as God gives us to see the right let us strive on to finish the work we are in to bind up the nation's wounds, to care for him who shall have borne the battle and for his widow and his orphan…to do all which may achieve and cherish a just and lasting peace among ourselves and with all nations."

20） 『リンカーン演説集』176頁

21） 感謝祭はローズヴェルト大統領が1941年，11月第4木曜日とした。

22） Morris, *The Birth of the Palestinian Refugee Problem Revisited*. Pappe, *The Ethnic Cleansing of Palestine*. Shlaim, *The Iron Wall*.

23） Silver, *Our Exodus*, p. 35–108

24） Shlaim. *The Iron Wall*, p. 95–98

25） Jewish Visual Library

26）ハルタブは1976年，アラブ人とドイツ人の過激派によるエールフランス機乗っ取り事件で乗客としてウガンダのエンテベ空港で人質になったが，イスラエル特殊部隊に解放された。ハルタブの母はウガンダの病院に取り残されアミン大統領の兵士に殺害された。ハルタブは1960年に写真集『エクソダス再訪』（***Exodus Revisited***）をユリスの文章と共に出版した。

27）Mitelpunkt, *Israel in the American Mind*, p. 33–58, Kapalan, *Our American Israel*, p. 58–93

28）サイード『戦争とプロパガンダ』138頁。初出はエジプト紙『アルアハラム』2001年８月30日～９月５日。国際テロ組織アルカイダによる9.11米同時テロの直前である。私は当時，共同通信社のロンドン支局からエルサレム支局に出張しイスラエル軍のパレスチナ自治区侵攻とパレスチナの自爆テロを取材していた。

29）サイード『オリエンタリズム』（上）57–59頁，同（下）164–167頁

主な参考文献

Anderson, Benedict, *Imagined Communities*, Verso, 2006

Cherry, Conrad edit. *God's New Israel: Religious Interpretations of American Destiny, Revised and Updated Edition*, The University of North Carolina Press, 1998

Bellah, Robert, “Civil Religion in America” Daedalus, *Journal of the American Academy of Arts and Sciences*, Winter 1967.

Goldman, Shalom, *God's Sacred Tongue: Hebrew & the American Imagination*, The University of North Carolina Press, 2004

——, *Zeal for Zion: Christians, Jews, & the Idea of The Promised Land*, the University of North Carolina Press, 2009

Kaplan, Amy, *Our American Israel: The story of an Entangled Alliance*, Harvard University Press, 2018

Kuklick, *Bruce, A Political History of the USA, One Nation Under God, second edition*, Red Globe Press, 2020

Mitelpunkt, Shaul, *Israel in the American Mind: The Cultural Politics of US-Israeli Relations, 1958–1988*, Cambridge University Press, 2018

Morris, Benny, *The Birth of the Palestinian Refugee Problem Revisited*, Cambridge University Press, 2004

——, *1948: The First Arab-Israeli War*, Yale University Press, 2008

Obama, Barak, *A Promised Land*, Crown Random House, 2020

Pappe, Ilan, *The Ethnic Cleansing of Palestine*, One World Publications Limited. Oxford, 2006

Reich Bernard, Goldberg, David, *Historical Dictionary of Israel, third edition*, Rowman & Littlefield, 2016

Sanger, David, *The Perfect Weapon: War, Sabotage, and Fear in the Cyber Age*, Scribe Publications, 2018

Shlaim, Avi, *The Iron Wall:* Israel *and the Arab World*, Norton, 2014

Silver, M.M., *Our Exodus: Leon Uris and the Americanization of Israel's Founding Story*, Wayne State University Press, 2010

Tal, David, *The Making of An Alliance*, Cambridge University Press, 2022

Uria, Leon, *Exodus*, Bantam Books, 1958

大下尚一「ピューリタニズムの形成と伝統」講座アメリカの文化１『ピューリタニズムとアメリカ　伝統と伝統への反逆』（南雲堂，1969年）

斎藤眞著，古矢旬・久保文明監修『アメリカを探る　自然と作為』（みすず書房，2017年）

サイード，エドワード著，中野真紀子約『戦争とプロパガンダ』（みすず書房，2002年），板垣雄三・杉田英明監修・今沢紀子訳『オリエンタリズム（上）（下）』（平凡社ライブラリー，1993年）

ジェファソン，トマス著，中屋健一訳『ヴァジニア覚え書』（岩波文庫，1972年）

ジョンソン，ポール著，別宮貞徳訳『アメリカ人の歴史Ｉ』（共同通信社，2001年）

スミス，アントニー著，一條都子訳『選ばれた民　ナショナル・アイデンティティ，宗教，歴史』（青木書店，2007年），庄司信訳『ナショナリズムとは何か』（ちくま学芸文庫，2018年）

パットナム，ロバート，キャンベル，デヴィッド著，柴内康文訳『アメリカの恩寵　宗教は社会をいかに分かち，結びつけるのか』（柏書房，2019年）

樋口範雄著『アメリカ憲法』（弘文堂，2011年）

ビラード，リチャード，リンダ―，ロバート著，堀内一史・犬飼孝夫・日影尚之訳『アメリカの市民宗教と大統領』（麗澤大学出版会，2003年）

フーコー，ミシェル著，田村俶訳『監獄の誕生――監視と処罰』（新潮社，1977年）

藤本龍児著『アメリカの公共宗教　多元社会における精神性』（NTT 出版，2009年）『ポスト・アメリカニズムの世紀　転換期のキリスト教文明』（筑摩選書，2021年）

ベラー，ロバート他著，島薗進・中村圭志訳『心の習慣　アメリカ個人主義のゆくえ』（みすず書房，1991年），ベラー他著，中村圭志訳『善い社会　道徳的エコロジーの制度論』（みすず書房，2000年）

ホーフスタッター，リチャード著，田村哲夫約『アメリカの反知性主義』（みすず書房，2003年）

村田晃嗣著『レーガン　いかにして「アメリカの偶像」となったか』（中公新書，

2011年）
森本あんり著『反知性主義　アメリカが生んだ「熱病」の正体』（新潮選書，2015年），『キリスト教でたどるアメリカ史』（角川ソフィア文庫，2019年）
リンカン，高木八尺・斎藤光訳『リンカン演説集』（岩波文庫，1957年）

American Liberal's Pro-Israel Views, Civil Religion and, Founding Myth

Yasushi Funatsu

The US. Republican party's pro-Israel policy is well known. The Trump administration moved the US embassy in Tel Aviv to Jerusalem despite fierce international opposition. However, President Biden, who denounced most of Trump's other policies, showed no willingness to move it again. Trump's embassy move was based on the 1995 Jerusalem Embassy Act. The law had been adopted in the Congress with overwhelming support including Democrats. Looking back into history, Democratic President Truman recognized the establishment of the Jewish state immediately after its declaration of independence. Kennedy was the first president to officially talk about the US-Israeli "special relationship." Carter and Clinton invested much of their political capital in the Mideast peace process. Even Obama, who had difficulty in his relation with rightist Israeli government, said that America's strong bonds with Israel was unbreakable.

What is the reason for American bipartisan support? Religion, values, strategy, lobby, and the Holocaust are factors often cited. I here concentrated in religion and values, which, are major components of political culture. In the U.S.-Israeli relationship, religion means Judeo-Christian tradi-

tion. Values mean freedom, human rights, rule of law, and democracy. Sociologist Robert Bellah's concept "American civil religion" is useful. Civil religion originated in Puritanism. There was abundant Hebraic symbolism such as the Exodus, the Promised Land, and "New Israel". Then American revolution conflated Protestantism and liberal democracy. Lincoln's historical addresses and tragic assassination added moral depth and symbolism of sacrifice. Under the constitutional prohibition on the establishment of a state church, American civil religion cannot be Christianity, though both are very similar.

After the World War II and the Holocaust, the term "Judeo-Christian tradition" rapidly gained currency in the Cold War anti-Communism, anti -atheism fever. Israel needed help from American superpower. Israel used variety of political means including propaganda. Scholars agree that Leon Uris's best-selling novel "Exodus" and its film adaptation by Otto Preminger were by far the most successful cultural events. Uris, a Diaspora Jew, an American writer, was eager to dispel negative images of Jews as weak victims. He created Zionist superhero, a fighting brave Jew with whom an American Christian blond fell in love. Uris aimed Americanizing Zionism. He utilized the similarity of both nation's founding myths. Jewish settlers were presented like American pioneers in the western frontier. They embodied civilization and progressivism. He presented Zionism as the anti-colonial struggle against the British Empire. Jewish extremists were not terrorists but freedom fighters. On the contrary, Palestinian Arabs, displaced from their indigenous land, were represented as uncivilized, savage Orientals. Edward Said, a Palestinian American author of the book "Orientalism", which criticized European Oriental scholarship for its contribution to colonial powers, lamented that both "Exodus" had falsely represented the Palestinians based on Zionist narratives.